鹿児島県立与論高等学校
# 校長通信
第９号（令和7年2月12日／校長 大倉秀心）

校訓「好学 創造 親和 不屈」
鹿児島県大島郡与論町茶花1234番地１
電話（0997）97-2064
FAX（0997）97-2844

## 「ヨロン海洋教育フェア」所感

１月28日（火），与論の海，海に守られた伝統・文化，海と共に生きる人々の姿について児童生徒と地域の大人が学び合うことを目的に，「第５回ヨロン海洋教育フェア」が開催されました。町内の小・中・高等学校が海洋教育の学習成果を共有することで，児童生徒の個々の学びを深める機会になったと思います。

本校からは，「東京大学サイエンスキャンプ成果報告」「人口減少の効果的な取り組みの模索（１年生）」「与論のムヌ（２年生）」について発表が行われました。それぞれが，校内での発表時のものに修正が加えられ，より伝わりやすく質の高いものになっていたように思えました。

サイエンスキャンプ組は発表の最後に，「自分たちの探究テーマはこの発表で完結するものではない。後輩の皆さんに是非引き継いでほしい」と語りました。これは非常に重要な視点で，学問や研究に終わりはないことを考えると，先行研究をもとに新たな課題を掘り起こし，その解決を図ることでより質の高い探究となり，実際に社会で実用化されれば，世の中への貢献にもなるのです。例えば，話題になっていた「グリーンベルト」なども，なかなか島内で普及しない理由をもっと突き詰めて解析し，高校生としてできる提言にまとめれば，大学の研究レベルに近づくと思います。後輩たちの探究に期待したいところです。

「人口減少」についての発表は，与論島の住宅事情にメスを入れたもので，今後の島の持続的発展を考えた場合，避けては通れないテーマです。住みたくてもアパート・マンションの空きがない，空き家はあっても様々な事情で登録されておらず住めないとなれば，せっかく与論に住みたいというニーズがあっても，それを活かすことができません。この問題についても，今回の発表で終わるテーマではないでしょう。

「与論のムヌ」についての発表も，自然や環境などを科学的な視点から考察することが多くなりがちな海洋教育の中で，民俗学的なアプローチも可能となるような人文学関連の非常に興味深いテーマでした。与論にどうしてそのようなムヌ（幽霊・妖怪）の話が伝わっているのか，人々の生活とどう関わっているのか，与論島内の地域によって話に違いはあるのか，島外に伝わる類似の話（奄美大島の「ケンムン」など）とどんな共通点や相違点があるのか，などをさらに掘り下げていけば，先人たちがどんな環境でどんなことを畏れ敬いながら生きていたかに光を当てることができるかもしれません。このような探究は，私たちがこれからどう生きるべきかを考える上で，大切な道しるべになる可能性もあるのです。是非，継続して深めてもらいたいテーマです。

## 島内最上級学校の責任

今回，このフェアに参加して，これはいい行事だなと感じたことの一つは，小・中・高の異年齢集団が一堂に会するということでした。皆さんは，小・中学生の発表を見て，「ああ，自分にもこんな時期があったな」などと，小・中学生時代の自分を懐かしみながら見ていた人もいたのではないでしょうか。逆に，小学生にとっての皆さんは，とてつもなく大きな存在に感じるでしょうし，中学生にとっては，少し年上の兄さん・姉さんではあるが，手の届かない存在と思っているかもしれません。そんなふうに高校生の皆さんが，彼らにとって身近な憧れの存在となるためには，発表する側はもちろん，聴く側の態度や，質問の積極性など，後輩たちの模範となるような言動を心がけてほしいと思います（もちろん，今回皆さんの態度が悪かったという意味ではありません。今後このような機会があるときには，さらに意識しましょうという意味です）。凜として颯爽とした高校生の姿は，この与論島には絶対になくてはならないものなのです。

## 「思イドゥ運命（ムヌサリ）、請ドゥ幸運（フイウブン）」

本校生の発表もさることながら，個人的には中学生の発表も素晴らしかったと感じました。「防災意識を高める，各家庭用防災パンフレット」「女子サッカーを盛んにするために」をテーマに，二人の女子生徒さ

んが発表しました。私が感銘を受けたのは，彼女たちの「思い」がひしひしと伝わる発表だったという点です。

非常用持ち出し袋などに関連して防災について考え探究を進めながら，全住民同じものではなく，住む地域や各家庭によって避難時に必要なものや行動は違ってくるのではないかということに気づく。そして，各家庭独自の防災パンフを配ることを思いつく点などは素晴らしいと思います。

一時期に比べ競技人口が減っている日本の女子サッカーを，人口に対する競技人口の比率では，全国でも高い位置にいる与論から何とか盛り上げたいと，日本サッカー協会に手紙も書き続けているという生徒さんには感動すら覚えました。

この二人の生徒さんに私が共通して感じたのは，「やらされ感」が微塵も感じられないということでした。フェア終了後，私は二人に声をかけました。「防災パンフ」の彼女は，「私はすごく心配性なのです。いろんなことが心配になってしまうのです」と話していました。心配性であるからこそ，防災時に必要なアイディアが次々と出てくるのかもしれません。自分の個性をフルに活かしています。「女子サッカー」の彼女は，サッカー愛に溢れていて，自分の大好きなサッカーを少しでも多くの人に知ってもらいたい，体験してもらいたいという「熱さ」が感じられました。

高校で「総合的な探究の時間」が始まって数年がたちます。数多くの生徒の探究発表を見てきましたが，面白くないもの，心を動かされない発表の典型が，授業でやらなければならないから何となくテーマを選んだ「やらされ感」満載の探究。自分の「好き」「面白い」「知ってほしい」「こうなってほしい」という純粋な「思い」から生じていないテーマの探究です。これは絶対に相手に伝わりません。その点で考えると，今回発表した与論中の二人は，こちら側が何とか応援したくなるものでしたし，私としては，本校でさらに探究を深め，与論の後輩たちの模範になってもらいたいと感じた次第でした。

与論には，「思イドゥ運命（ムヌサリ）、請ドゥ幸運（フイウブン）」ということわざがあるようです。「思い願うことがその人の運命となり，請い願うことがその人の幸運につながる」という意味です。「自分はこうしたい，このようになりたい」と，常に思い描いて唱え，そしてそれに見合うだけの計画を立てて努力を続けるならば，必ずその夢は実現できるという教えです。「そうかそうか，そのように思うこと・考えることは，天が君に与えた役割であり運命なのです。これからも天は，君の願いが本物であるかどうかを試すために，いろいろな試練を与えるであろう。その試練に耐えて頑張れば，必ず君の願いは実現できるのです。頑張りなさい。」と，諭し励ますこのことわざを彼女たちに贈りたいですね。（「思イドゥ運命（ムヌサリ）、請ドゥ幸運（フイウブン）」のことわざについての記載は，『松陰の現代化』田中國重　を参考にしました）

## 国公立大学2次試験

２月２５日（火），いよいよ国公立大学２次試験が実施されます。共通テストのマークシートとは違い，２次試験は記述式が大半です。記述試験を受ける際の注意点を挙げておきます。

試験問題には当然，出題者がいます。その出題者の「意図」は何か。これを考えずに自分勝手に設問を解釈し，自分の都合のいいように答案を作成してはいけません。例えば国語や英語なら，出題者がその設問文から本文のどの単語や文章に注目してほしいと思っているのか，数学や理科ならその問題でどんな公式や定理を出題者が使わせようとしているのか等をまず考えることが大切になります。

これは例えて言うなら，出題者から投げられたボールをしっかりとキャッチすることを意味します。キャッチできないボールを投げ返すことは当然できません。このボールに当たるのが出題意図なのです。今度はそのボールを出題者が構えているミットに，「私はあなたの出題意図をきちんと受け止めていますよ」という思いを込めて，『ど』ストライクで投げ返さなければならないのですが，この行為が答案作成なのです。従って，自分勝手な方角に投げてしまえば出題者がキャッチできるわけはなく，この場合採点対象にすらならないのです。いわば，２次試験の解答用紙は，出題意図を受け止め，自分の問題に対する理解度を受験生が出題者に正確に伝えるための「作品」と言ってもいいでしょう。出題者にとってわかりやすい丁寧な表現力が必要となります。

【減点される答案例】
・証明問題なのに日本語がほとんどない
・用語・記号の使い方に無頓着
・読めない，書きなぐり，乱暴な展開
・日本語で誤魔化そうとする答案
・数学的に明らかな誤りを意図的に誤魔化す

試験直前まで準備を怠らず，試験が始まったら最後の１秒まで諦めないでください。皆さんにとっての最高の「作品」を大学に提出してきてください。健闘を祈っています。